

# ニューズレター

*News Letter*

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE, Kanto Gakuin University

## 巻頭言

2017年度、2018年度キリスト教と文化研究所の所長を務めさせていただきました。この大役を私が担うことができるのかと不安を持って就かせていただきましたが、所員、研究員の先生方、また事務を担う職員のお二方に支えられ、無事にその任期を終えようとしています。まず、心から感謝の意を表したいと思います。

長年この研究所に所員として関わり、所長に就任した際に考えていたことがいくつかありました。更なる研究の推進と研究の成果を社会に還元すること、そして、研究が学生に還元される方法の模索の3つでした。幸いにも今年度から、新しい研究グループ「キリスト教とシェイクスピア研究」が立ち上げられ、その研究の成果は所報にも掲載されました。キリスト教と文化研究所において積極的に研究に関わっていきたくて集ってくださった方々を心より歓迎したいと思います。

研究の成果は論文、シンポジウムや公開講座などの形で社会に還元されています。すでに社会連携センター主催の公開講座へはキリスト教文化研究所の研究グループの講座が提供されてきています。シンポジウムもほぼ毎年開催され、今年度はキリスト教と日本の精神風土研究グループと坂田祐研究グループにより開催されました。前者は「キリスト教と哲学そして文学」という題目で、後者は「『坂田祐日記』の意義と課題」という題目で行われ、それぞれ活発な議論がなされました。さらに、この冬横浜歴史博物館で行われた「神奈川の記憶展」では関東学院ゆかりのあるコベル先生のフィリピンでの殉教にまつわる展示があり、坂田先生の日記も展示されていました。キリスト教と文化研究所の研究がこのような形で貢献できていることを大変うれしく思いました。

学生への還元という点では今年度から2つの企画を始めました。ひとつは研究グループで行われた講演を学生向けにも行うことで、今年度はいのちを考える研究グループで昨年度行われた講演『キリスト教倫理の視点から見た「いのち」=先進医療技術に伴う人間の「生と死」について』（講演者：理工学部教授 松田和憲先生）を開催することができました。もうひとつの企画は研究成果に基づき、学生に実際に参加してもらおう企画を行ったということです。具体的には奉仕ボランティア教育研究グループと宗教教育センターの共同企画による学生ボランティア活動です。（詳細は所報実践報告参照）

キリスト教と文化研究所では様々な専門分野からの知見をもとにそれぞれのテーマで研究活動を行っています。それらがますます深められ、発信され、多くの方々に貢献できるよう、今後もそのあり方を探っていけることを期待しています。



細谷 早里 所長

## 2018年度「坂田研究会グループ」シンポジウム

### 『坂田祐 日記』の意義と課題

坂田研究会グループ

去る2018年12月8日(土)、関東学院大学金沢八景キャンパスにて、坂田研究会グループのシンポジウム『坂田祐 日記』の意義と課題が開催されました。

富岡幸一郎先生の司会により、最初に花島光男実行委員長による研究グループの趣旨説明、次いで規矩大義学長からのメッセージのご紹介、そしてキリスト教と文化研究所・細谷早里所長のご挨拶がありました。

2部構成のシンポジウムと質疑応答、矢嶋道文先生のシンポジウムまとめ、増田日出雄理事長からの総評をここにご紹介いたします。

#### 【シンポジウム】

第1部 『坂田祐日記』を読む:講師(解説)古谷圭一氏  
研究会での解説作業(普段は古谷圭一先生をリーダーに全員で日記内容を確認)の様子を紹介し、参加者も解説作業を体験した。



第2部 シンポジウム『坂田祐日記』の意義と課題

- (1) 元県立公文書館研究員・東洋大学講師の中村崇高氏は、文書管理の立場から『坂田日記』を公表する場合の個人情報とセンシティブ情報の取り扱いについて留意する必要性を述べられた。公開することによる社会的意義、マスキングの基準の明記により情報の質を保つ必要性などを指摘された。
- (2) 国際文化学部客員研究員・元岩波書店編集部の樋口良澄氏は、『広辞苑』掲載の可能性についてお話しされ、『坂田日記』は文学者の『西脇順三郎日記』と同時代のものであり、文学者の日記刊行に近いと述べられた。会津の武士で戦時下のキリスト者である坂田の18才から晩年までの日記には、足尾、宇都宮陸軍、日露戦争、キリスト教入信、教育という流れがある。辞書掲載にあたり、人が知ろうとする坂田先生像を様々な面から問われることが大事である。
- (3) 神奈川テレビ顧問・本学講師の三好秀人氏は、マスメディアの視点からお話しされた。幕末から近代、横浜の開港の歴史の生き字引的な生涯を送った坂田の残した「平和のチャンピオンになれ」「武力は平和をもたらさない」という言葉を紹介された。坂田に光を当てることが、関東学院の歴史の新たな発見につながる。
- (4) 本学名誉教授・元文学部長の小林照夫氏は、坂田祐先生と建学の精神についてお話しされた。校章の三葉の意味するものはキリスト教の三位一体を表し、また同時に知育、徳育、体育を目指すことも示している。開学当時のフロップ宣教師のバイブル・クラスの活動や、富田富士雄先生が障がいや数々の困難に屈せず横浜の福祉の礎造りに貢献され、関東学院大学で坂田先生の教えを教育で体現されたお話などを紹介された。

- (5) 元関東学院中高教諭・磯子の丘教会牧師で坂田先生の門下生の海老坪眞氏は、坂田先生の授業や生徒との深い関わりについてお話しされた。空襲を前にした生徒に「我は復活なり、生命なり……我を信ずる者は死なざるべし。汝これを信じるか」との聖書の箇所を選んで読まれた。広報誌の「いんまぬえる」を発刊し、関東学院の「人になれ奉仕せよ イエス・キリストが土台である」という校訓においては、この「土台」が重要であるというのが坂田先生の解釈であったと話された。



#### 【フロアーからの質問に答えて】

- ・広辞苑への掲載への可能性から言うと、日記以外の坂田先生の多面的な坂田論が必要である。
- ・坂田先生は、毎朝、内村鑑三著の『一日一生』を読んでいた。記憶力はすばらしく毎日、新聞やニュースに関心をもって読み日記を書いていた。
- ・大学のブランド力については「メービー・メモリアル・スクール」と呼ばれていたことや、坂田先生の「平和のチャンピオン」といった言葉のキャッチコピーを用いて発信することが効果的と思われる。
- ・日記解説については、途中発表においても基準は必要である。家族、学生の処罰の記述については留意が必要である。また、旧制の事柄から新制へのつながりが重要である。
- ・公立学校とは異なり私立学校においては、学校の教育の理念を支える建学の精神がその特徴である。私学の特徴、学風を社会に発信すべき。神奈川の教育においても関東学院のような私学が頑張ることで神奈川の教育のすそ野が広がっていく。

#### 【シンポジウムまとめ】 矢嶋 道文 先生

- ・中学関東学院を発足するにあたり、坂田先生は、内村鑑三から日本にある学校として「武士道の精神をもつミッションスクールであって欲しい」とアドバイスを受けた。そのことが戦時期におけるミッションスクールという難しい学校運営を担う上で一つの支えとなっていた可能性があり、この点は、「教育勅語」を学校運営に尊重した坂田先生の教育思想を考える上でも今後の研究課題である。
- ・しかしその一方で、太平洋戦争最中にある1942年、各紙が日本の快進撃(偽情報)を連日大きく報じている中、坂田先生は戦時に関する事を私的日記であっても全く書いていない。内容は関東学院の経営・運営と教育に関する記事が大半である。これらの記述において坂田思想の線引きが意図的かつ継続的になされたとすると、今後注目すべき研究課題である。

#### 【総評】 増田 日出雄 理事長

1部では『坂田祐日記』の解説がどのようになされているのかが良く理解できた。また、シンポジウムでのゲストの先生方のお話は大変参考になった。これからも関東学院の建学の精神を十分尊重し、活かしていきたいと改めて考えた。建学時の思いをしっかりと維持し、関東学院らしさを保つためにも、今後とも坂田研究会の継続・発展を望みたい。

高橋 彰



客員研究員として「坂田祐研究グループ」に参加させていただいています高橋彰と申します。わたしは関東学院高等学校入学を機にキリスト教に出会い、バプテスト教会でキリスト者になりました。現在は大学金沢八景キャンパスで日曜礼拝を行う関東学院教会牧師、また関東学院六浦中学校高等学校で聖書科非常勤講師として、そして関東学院のルーツの一つである横浜バプテスト神学校からの流れにある日本バプテスト神学校で組織神学部門とキリスト教と現代的課題を扱う科目を担当し、バプテスト教会で働く伝道者養成に携わっています。キリスト教学校、教会、そして神学研究の場がよい連関を持って、現代の日本におけるキリスト教の特徴や課題を探求してゆくことに可能性を期待し、働きをさせていただいています。

その点からも坂田祐研究は非常に興味深いテーマです。無教会の影響を受けたバプテスト教会のキリスト者であり、軍人から教育者となり、19世紀末～20世紀の激動の日本、横浜で生きた人が60年以上にわたって綴り続けた日記を始め、当時の諸資料を読み解くことを通して、見えてくること、考えさせられることがさまざまにあります。諸先生方の緻密で誠実な取り組みに学び、研究に携わらせていただけることを感謝しております。どうぞよろしく願いいたします。

海老坪 眞



### 坂田祐先生に学ぶ

記憶力抜群の思い出として、私が1942年中学5年生だった頃公民の授業で先生が呼名出席確認する時、一人一人をじっと15秒位顔を見つめる事が、1年間毎時間の習慣だった。敗戦復員した私がある日の事、関東学院と霞ヶ丘教会の無残な焼け跡を見てから久保山の坂を下っていた時に坂を上ってくると、「海老坪ではないか？」と呼びかけられたのが先生だった。尊敬する教師の条件の一つは生徒の名前と顔を覚えてくれる事だ。同じ話題で私の親戚の北見徳五郎の日露戦争の時の上官が先生だったと知り、翌日「先生！北見徳五郎と言う人の記憶ありますか？」・・・1分ほど考えて「うん！覚えている、北見徳五郎はわしの部下だった！」と。後日二人は再会の時を持った。

先生がよく語られたことばとしては「人になれ」「奉仕せよ」は言うまでも無く、聖句では「インマヌエル」(マタイ1:23)であった。また先生の奥様のご臨終に何度も読まれた聖句はヨハネ伝11:25だった。更に愛誦聖句には使徒1:11、ローマ3:21~28、黙示録7:13~17等があり、又ご自宅には箴言16:32が額縁入りで飾ってあった。讃美歌の愛唱歌は66・217・320・492・541であり、日露戦争で戦死を覚悟した際には320番を歌われた。



関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501横浜市金沢区六浦東1-50-1  
TEL : 045-786-7873 (研究所直通・月～金9:30～17:00)  
FAX : 045-786-7806 (研究所直通・24時間受け付)

発行者：細谷 早里  
Director : Sari Hosoya